教育コラム

すくすくたけのこ

2023.2.10 vol.1

“ 親の役目 ” って 何？

この度は「関西創価小学校 きっずくらぶ」に入会いただき、誠にありがとうございます。
また、昨年から継続いただいている皆様にも、心から感謝申し上げます。

本くらぶでは、親子で楽しめる動画やオリジナルグッズ、子育ての参考となる教育コラムをデジタルコンテンツとして配信していきます。
どうぞ、ご期待ください。

「子は親の鏡」

「子は親の鏡」という言葉があります。また**「親の背を見て子は育つ」**ということわざもあります。子どもは、親の姿から様々なことを学び、身につけていくのですね。

わが子が入園する前、トイレトレーニングがはじまったころのお話です。

よく行く近くのスーパーで、オムツの安売りセールが行われていました。

それを見た息子が、そこで一言。

「きょうは、オムツやすいから、ひとつ、かっていこうか！」。

それを聞いた母の一言。

「それを言う口があるなら、早く“トイレ”と言ってよ！」。

思わず笑みがこぼれるようなエピソードですが、「安いのがあったら買っておこう」という、いつもの口ぐせが、わが子にうつったのだと、彼女は振り返っていました。

子育てのエピソードをもうひとつ。

こちらは、新聞に載っていたお話。

癇(かん)が強い長女は、人見知りが激しく、登園渋りも激しかった子。

そんなある日のできごとです。ままごとをしていたこの子が、

「お母さんは、“私の役 ”になってね。私が“お母さん役 ”になるね。『おかーさーん。保育園行きたくないよー』って言って！」。

と言われました。母親役の娘からどんな言葉が返ってくるかとドキドキしながらそのセリフを口にしました。

すると娘さんは、

「だいじょーうぶ。だいじょーうぶ。行けば楽しいよー」。

と一言。お母さんは、ほっと胸をなで下し、普段「何言っているの！」などと言っていたら、きっとそんなセリフが返ってきただろうと思われたそうです。

「聞いている言葉は娘の心に少しずつ入っている。何かあった時は、心の器に入っているものがこぼれ出してくる・・・・・・」。

と、しみじみ感じられたというのです。

「迷い」と「悩み」の違い

この新聞記事のタイトルは、**「心の器にプラスの言葉を」**でした。ステキな言葉ですね。

とは言っても、なかなか思うようにいかないのも子育ての現実。「子は親の鏡」「親の背を見て子は育つ」という言葉が、プレッシャーとして重くのしかかってくるのも事実です。

親として、子や子どもへの関わり方、特にことばのかけ方については、誰もが悩むものです。あるとき、そのことを先輩に打ち明けたところ、

「それは、“迷い”と“悩み”、どっち？」

と聞かれました。

「“迷い”と“悩み”の違い」の返答に戸惑っていると、その違いについて語ってくれました。

○「迷い」は、その場に立ち止まって、どうしようかと、あれやこれやと考えていること。

○「悩み」は、ある目的に進みながら、そこに生じる壁と取り組んでいること。

そして、まず、**「“親の生き方が大切だ”と決めることだよ」**と話してくれました。

「存在認める言葉かけ」が大きな自信に

教育評論家の親野智可等さんは「褒める」ことの重要さを強調した上で、褒めるという行為には**「条件褒め」「無条件褒め」の２種類**があると語っています。

「条件褒め」とは、子どもが何か条件を達成した時、**「宿題よくできたね！」「一人で留守番できて偉いね！」**といった言葉がそれに当たります。

一方、後者の**「無条件褒め」**とは**「生まれてきてくれてありがとう」「どんなあなたでも愛しているよ」**など、**存在自体を褒めてあげること。**

「条件褒め」も大切だが、特に「無条件褒め」が子の自己肯定感を高めるために非常に重要なポイントである、と綴っておられます。

「存在を認められた」と感じた子は強くなります。それは、「失敗しても受け入れてもらえる」という**絶対的な安心感**があるからです。

そうした子は、失敗を恐れずに多くのことに挑戦するようになります。そしてトライ＆エラー(試行錯誤)を繰り返しながら、成功体験を積み重ねて行く中で、**その子らしい自分らしさを輝かせていきます。**

親の役目は“骨格”づくり

親の役目って何でしょうか。

創立者はそのことについて、次のようなお話をされたことがありました。

親の役目の一つは、子どもが人生を生きていくうえでの“骨格”をつくってあげることです。試験の科目みたいに、これとこれだけ教えておけばよい、というわけにはいかない。たんに話をして言い聞かせればよいというものではないし、いくら親が気負ったところで、子どものほうが心を向けてくれなくては“空まわり”になりかねない。

そうではなく、真剣に何かに打ち込む親の姿を見ながら、子どものほうがしぜんに興味や関心をいだいていく。その姿から、何かを学んでいく――それが「家庭教育」の根本となるものです。(中略)

“どうして、お母さんはあんなに一生懸命なのだろう？　“ああしている時のお母さんは、本当に楽しそうだな”と、母親の表情や声の調子から、子どもは敏感に感じ取って、知らずしらずのうちに、「生き方」の骨格が築かれていくものなのです。

子どもにとって、**本当に自分を支えてくれる親**とは、「ずっとそばにいてくれる人」「何でも願いを叶えてくれる人」、そんな人ではありません。

チャレンジしたいときに見守り、失敗しても、共に歩んでくれる**安心の土台**が、自分を支えてくれる**親の存在**なのです。

これからも、皆様の「よき子育ての“伴走者”」となれるよう、本コラムを綴っていきたいと決意しています。

どうぞ、よろしくお願いいたします。(晃)